神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Direct discourse is a marked form of reported speech : How ways of speech representation are actually used in dialogic contexts

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2005-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山口, 治彦, Yamaguchi, Haruhiko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/678

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

直接話法は有標の構造である[1]

——対話的コンテクストにおける話法の実際——

山　口　治　彦

1．はじめに

これまでの話法研究は，次の二つを暗黙の前提としていた（山口，2003a）。

i）伝達節を伴う直接話法(direct discourse)と間接話法(indirect discourse)が話法の二大典型である。

ii）話法は第三者のことばを報告(report)するための言語手段である。

あまりにも当たり前に思える上記の前提は，しかし，従来の話法に対する私たちの関心をゆがめてきた（山口，2003bを参照）。たとえば，以下のやり取りに見られる引用表現は，これまで話法研究の対象とはならなかった（ただし，山口，1992，1994a，2000を参照）。

(1) CORIE : ...You won't let your hair down for a minute. You couldn't even relax for one night. Boy, Paul, sometimes you act like a... a...
→ PAUL: What...? A stuffed shirt?
CORIE: I didn't say that.

1　小稿の内容については，対照研究セミナーにおいて発表する機会があった。セミナー主催者の益岡隆志氏をはじめ，参加者の方々から非常に有益な意見をいただいた。ここに記して感謝したい。

PAUL: That's what you're implying.

→ CORIE: That's what you're anticipating. I didn't say you're a stuffed shirt. But you are extremely proper and dignified.

→ PAUL: I'm proper and dignified? (*He moves to* CORIE) When ...? When was I proper and dignified?

(N. Simon, *Barefoot in the Park*)

Paul による "A stuffed shirt?" や "I'm proper and dignified?" は，エコー疑問（もしくは問い返し疑問：echo question）と呼ばれるもので，前者は相手が言わんとすることばを代行して提示し，後者は相手の発話を繰り返すことで，相手の発話（思考内容）に対する驚きと不満を表明している。どちらも相手の発話（もしくは思考内容）を発話者の視点から引用したものである。話法を①直接的な引用か間接的な引用か，および ②伝達節と共起するか否か，という二つの形式的基準で切り分ける分類法に従えば，これらは伝達節を伴わない間接的な引用となり，自由間接話法(free indirect discourse)にあたる。しかし，エコー疑問は疑問文の特殊な例として扱われることはあっても，話法の一例としてとらえられることはほとんどなかった。

他方，Corie の "I didn't say you're a stuffed shirt." は形式上，間接話法の体裁をもつ。しかし，間接話法がこのように相手に異論を唱えるために用いられる例は，文法書には見られない。なぜか。話法は第三者のことばを報告するために用いられるものと信じて疑わないからである。さらには，従来の文法が話法に関してはもっぱら語り(narrative)の形態をとるものをデータにし，対話的な資料を考慮の範囲外においたからでもある。

では，これまで考慮されていなかったデータを話法の研究対象として取り込んだ場合，話法研究にどのような変更が必要となるだろうか。小稿の企図は，対話的なやりとりにおける話法の使用例を考慮に入れたうえで，直接的な話法と間接的な話法がどのように使い分けられているかを明らかにするこ

とにある。対話的なコンテクストでは，間接的話法が無標の選択であり，直接的な話法は例外的な場面でしか用いられない。直接的話法は，第三者のことばに焦点が置かれる語りのコンテクストにおいてはじめて無標の構造となる。そのことをまず主張したい。

なお，ここで言う「直接的話法」とは，いわゆる直接話法と伝達節を持たない自由直接話法を束ねた言い方である。「間接的話法」も同様である。直接話法と自由直接話法を，そして間接話法と自由間接話法をそれぞれ束ねるのには理由がある。それは，従来おこなわれてきた話法の4分法に動機付けをおこなうためである。上でも触れたように，英語の話法はこれまで①直接的な引用か間接的な引用か，および②伝達節を伴うか否か，という二つの形式的基準によってしばしば分類されてきた（たとえば，Chatman, 1978; Leech and Short, 1981; Quirk et al, 1985; Simpson, 1977などを参照）。この4分法が単なる形式的分類にとどまらず，積極的な存在意義を持つのなら，形式の違いが意味の違い，つまり機能上の差異を引き起こさねばならない。伝達節の有無が機能上の対立を引き起こしているについてはすでに山口，2003bで取り扱った。したがって，ここでは直接引用か間接引用かという区別が，どのような機能上の差異に対応するのかも明らかにしたい。これが小稿の二つ目のねらいである。

以下では，対話における自由直接話法と自由間接話法（3節），対話における直接話法と間接話法（4節），そして語りにおける直接話法と間接話法（5節）を順に取り上げる。直接的引用と間接的引用が，それぞれの場面で対立しあっていることを示したい。しかし，その前に小稿が前提とする内容について，もう一点確認しておこう。対話（dialogue）と語り（narrative）という対立軸についてである。

2．コンテクストの特殊化：対話から口頭の語りへ，そして書かれた語りへ

英語話法の記述は，小説や新聞記事などの書かれた資料をもとにはじめられた。事実，伝統的な文法の記述はそういったデータに限られている（たとえば，Jespersen, 1914; 木原，1955を参照）。80年代以降，口頭の資料を用いる研究が増えてきたが（Johnstone, 1987; Macaulay, 1987; Hickmann, 1993; Longacre, 1994などを参照），口頭の語りにデータを求めるものがほとんどで，対話的なやり取りを資料とする研究はあいかわらず少ない（Mathis and Yule, 1994; Holt, 1999などを参照）。文法書の記述について言えば，Biber et al, 1999のように口語に資料の多くを求める例もあるが，話法そのものに対する私たちの文法上の理解は，伝統文法のころから大きく変わったわけではない。つまり，小説や新聞記事をデータにした記述が私たちの話法に対する理解の根幹を成しているのである。

ここで重要なことは，そのような書かれた語りの例（ことに小説）が言語使用のコンテクストとしてはきわめて特殊なものであるという事実である。言語伝達のもっとも基本的な場は，向かい合った二人の参与者が相互に発話を交替しながらおこなう対話である。このような状況から，一方の参与者が過去の体験について話す語りのモードへと移行すると，多くの場合，実質的な発言権を語り手が独占することになる。そして，語りのコンテクストでは，（過去の語り手を含めた）今ここにはいない第3者のことばが報告される。対話は話し手と聞き手の2者が存在すれば成り立つが，語りのコンテクストではこの第3者が必ず存在しなければならない。ここに明確なコンテクストの変化が存在する。そして，小説や新聞記事はこの語りのモードにさらに書きことばが介在する。対話から口頭の語りへ，そして書かれた語りへとコンテクストは次第に特殊化される。なかでも3人称小説の語りは，3人称で語られる語りが口頭では稀有であることからもわかるように，きわめて特殊化の

度合いが強い。しかし，これまでの話法の議論（特に自由間接話法に関するもの，たとえばBanfield, 1982やFludernik, 1993）は，この3人称小説を中心に題材を採るものが多かった。このような特殊化された題材を扱うこと自体に問題はない。しかし，その資料が対話からどれくらい隔たったものか，常に留意する必要があるだろう。ことに話法を扱う場合はそれがことさら重要である。というのも，コンテクストが変われば，話法の果たす基本的な機能や用いられる典型的な形式も変わるからである。

たとえば，(1)におけるように対話的なやり取りにおいて相手の直前のことば（思考内容）を引用するのは，引用者は聞き手にそのことばを報告したいからではもちろんない。相手のことばを引用することによって，不満や異論を表明し言語伝達に支障が存在することを明らかにするためである。このような場面では，伝達節を持たない（したがって単純な形式をした）「自由な」話法が無標の選択として用いられる。伝達節付きの（したがってより複雑な形態をした）話法が直前のことばを引用する際に用いられるのは，(3)におけるようにある内容を言っていないと否定する場合など，「自由な」話法では手に負えない場面である。話法を用いて報告がおこなわれるのは，第3者のことばを聞き手に提示する状況にかぎられる。そして，報告がおこなわれる場合は，もとの発話者を明示するために伝達節付きの話法が用いられることが多い（山口，2003b）。このように，話法が担う機能とその形式は，その話法が用いられるコンテクストに左右されているのである。

小稿は，直接的な話法と間接的な話法がどのようなかたちで使い分けられているかを明らかにすることを目指す。そしてその際に，話法が用いられるコンテクストが対話なのか語りなのか，引用されることばが引用者にとって直前に発せられた近接的な(immediate: Chafe, 1992, 1994)ものか，過去に発せられた遠隔的な(displaced)ものか，という違いに留意しながら議論を進めたい。

3．エコーと模倣引用：対話における自由間接話法と自由直接話法との対立

対話的コンテクストにおいて近接的なことばを引用する場合，まず第一のオプションとして用いられるのは，伝達節のない「自由な」話法，つまり自由間接話法（エコー）と自由直接話法である。両者はｉ）自由かつ間接的な引用方法であり，およびii）引用者自身のイントネーションがかぶせられた多声的な(polyphonic)引用である，という点において共通する。この二つの特徴は，両者が対話のやり取りで用いられる意図に呼応している。近接的な発話が引用されるのは，その発話を報告するためではなく，もっぱらその発話によって引き起こされた伝達障害を乗り越えるために，ここに伝達障害があると明示するためである。自由話法は伝達節がない分だけ直前のことばに即座に反応することができ，また，伝達節を伴わないために引用者自身のイントネーションを付しやすい。つまり，直前のことばに対する態度を表明するのに便利なのである。

もっとも，自由直接話法と自由間接話法の双方が，同じように用いられるわけではない。両者の用いられ方には圧倒的な偏りが見られる。自由間接話法は幅広い用途に，そして頻繁に用いられるのに対して，自由直接話法は非常に限られた場面で限られた効果を発揮する。つまり，対話において近接的な発話に言及する際，自由間接話法が無標のオプションであり，自由直接話法は有標の形式となる。

まず，自由間接話法の例を見よう。[2]

2　自由間接話法といえば，小説に現れるものがよく知られている。しかし，口頭の語りでは時制がバックシフトされるような自由間接話法は頻繁に用いられるわけではない（ただし，山口，1989を参照）。本稿は口頭のディスコースで用いられる話法を第一に念頭に置くため，問い返し疑問(echo question)に代表されるエコー発話(echo utterances)を自由間接話法の中心的な例として考える。したがって，ここでは小説に現れるような自由間接話法の例を中心に取り扱うことはしない（ただし、(20)を参照）。

他方，エコーの引用としての性格を念頭においた研究はふえつつある（Sperber and Wilson, 1981, 1995; Yamaguchi, 1992, 1994a, b; Blakemore, 1994; Noh, 2000を参照。）

(2) ROBERT: I thought you knew.
JERRY: Knew what?
ROBERT: That I knew. That I've known for years. I thought you knew that.
→ JERRY: You thought I knew?
ROBERT: She said you didn't. But I didn't believe that.
(H. Pinter, *Betrayal*)

Jerry は Robert の妻（"She"）とかつて不倫関係にあった。Robert はそのことを承知しているが，Jerry は Robert には知られていないと思っていた。それゆえ，Robert のことばがにわかには信じられず，そのことばを繰り返す（"You thought I knew?"）。繰り返すことにより，前言を額面どおり受け入れるだけの用意がないことを示している。

繰り返すにあたり，間接引用であるエコーは原発話の直示表現（deictics）を引用者の視点に見合ったかたちに変更する。直接的な引用とは違い，直示表現が統一されているため，解釈する際のコストが低い（内田, 1994, 1997）。自由話法が直前の発話に対し即座に反応しやすい構造をしていることは先に述べたが，なかでも自由間接話法は間接引用をおこなうだけに，話者の立場に根ざしたインタラクティブな反応が可能になる。対話において自由間接話法が無標の構造であることには，それなりの理由があるのである。

自由間接話法は，また，多様な用途に用いられている。たとえば，(2)において Jerry は Robert に対し"Knew what?" と言っているが，これは自由間接話法に特徴的に見られる用法である。聞き取れなかった箇所を what で置き換え，その箇所に関する情報の再提示を求めている。他方，(1)において Paul は "A stuffed shirt?" と疑問を提示したが，これは相手の考えている内容を代行提示している。(2)の *wh*-echo question（Janda, 1985や Yamaguchi, 1994bを参照）や(1)の代行提示の用法は，自由直接話法には見られない，自由間接話法独自のものである。

さらに，自由間接話法は疑問を発するだけでなく，感嘆や断定なども表明しうる。Quirk et al, 1985は echo exclamations の例を，そして大沼，1970は echo declaratives や echo imperatives の例をそれぞれ挙げている。(3)は echo declaratives の例である。

(3) ANNIE: I don't think I mind analysis at all. The only question is, Will it change my wife?
→ ALVY: Will it change your wife?
→ ANNIE: Will it change my life? (W. Allen, *Annie Hall*)

"Will it change my wife?" という Annie の言い間違いに対して，Alvyがまずエコー疑問によって言い間違いを指摘しようとする（"Will it change your wife?"）。映画ではそれを受けて Annie が "Will it change your wife?" と下降調のイントネーションで自分のせりふを提示しなおす。この発話は "I said, Will it change my life?" くらいのニュアンスを持ち，自らの発言を断定しなおすような響きがある。[3]

これに対し，自由直接話法はまれにしか用いられない。自由間接話法とは違い，かなり特殊な効果をもたらすからである。まず，例を見てみよう。

---

3 この例は，人称の変更を含まないので形式上は，直接引用と区別しがたい。しかし，以下の例では，もとの発話を直接引用したのではないことがわかる（大沼，1970）。

A: Do I look silly?
B: What?
A: Do I look silly.

Aの2度目の発話は，通常，下降調のイントネーションを付して発話される。直接引用なら，原＝発話と同じ上昇調のイントネーションとなるはずである。
また，以下は代行提示の例（下線部）であるが，同様に断定のイントネーションを付して提示される。

JACKIE: Go on, I'm waiting. Will I be a good girl and leave dear persecuted Kay alone? That's it, isn't it? (A. Christie, Murder on the Nile)

この場合は，"Will I be" とあるように，間接引用であることが明らかである。

(4) SELRIDGE: What an asshole.
HENNESEY: It's my last week. I can spend it any way I want. I'd like it to be with my family.
→ CARNEY: (Mimicking him) I'd like it to be with my family.
SELRIDGE: Go ahead, Jerome. What do you give him for that crap?
EUGENE: It's not interesting but at least it's honest...I give him a B-plus. (N. Simon, *Biloxi Blues*)

(5) BRINDSLEY: (*Trying to keep* control) I just want to be connected... Thank you. (*To Miss Furnival*) Miss Furnival, do you by any remote chance have any candles?
MISS FURNIVAL: I'm afraid not, Mr Miller.
→ BRINDSLEY: (Mouthing nastily at her) 'I'm afraid not, Mr Miller'... (Briskly, into phone) Hallo? Look, I'd like to report a main fuse at 18 Scarlatti Gardens. My name is Miller. (Exasperated) Yes, yes! All right...!
→ (Maddened: to the room) Hold on! Hold bloody on!...
MISS FURNIVAL: If I might suggest-Harol Gorringe opposite might have some candles. (P. Shaffer, *Black Comedy*)

どちらの例も対話者の直前のことばを，そのままのかたちで伝達節を添えずに繰り返して——自由直接話法で引用して——いる。そして，どちらの例においても，対話者に対するあざけりや批判が感じられる。山口，2003bでは，このような話法を「模倣引用」と名づけた（なお，山口，2000も参照）。もう少し，例について説明しよう。

(4)では，登場人物たちは，あと1週間しか生きられないとすれば何をするかというお題目に対し，もっとも愉快なアイディアを出した者が掛け金を総取りにする，という遊びに興じている。「家族と過ごす」というあまりに平凡な Hennesey の考えを，Carney はその発話を口真似しつつ再現すること

で笑い飛ばす（“I'd like it to be with my family.”）。

(5)は停電中の会話。いざというときに停電になってしまい Brindsleyはいらいらしながらも電力会社に電話しようとしている。慌てる Brindsley に比べ，Miss Furnival はあいも変わらずご丁寧なマイペース。その態度にいらついた Brindsley は腹いせに Miss Furnival のせりふを声には出さずに口の動きだけでいやみに繰り返す（“‘I'm afraid not, Mr Miller’”）。さらには要を得ない交換手のことばを繰り返し，悪態をつく（“Hold on! Hold bloody on!”）。どちらの例にも敵意が感じられ，独り言としてしか発しづらい発話である。

このように，(4)と(5)においてはかなり失礼な引用がおこなわれている。模倣引用は相手の発話を矮小化し，パロディー的に模写する。そして，引用された発話がまじめな考慮に値しない，引用者の視点や信念からはかけ離れた異質のものであることをしばしば示す。もっとも，自由直接話法が常に敵意をむき出しにした攻撃的な引用というわけではない。笑いの要素が加わると，もう少し穏やかなパロディーとして提示されることもある。(6)がそうである。Marianne と Elinor は対照的な姉妹。妹の Marianne は積極的な情熱派。一方，姉の Elinor は控えめで堅実な性格。意中の人ができた姉に妹は単刀直入に問いかける。

(6) MARIANNE: Do you love him?

The bold clarity of this question discomforts ELINOR.

ELINOR: I do not attempt to deny that I think very highly of him—that I greatly esteem—that I *like* him.

MARIANNE: Esteem him! Like him! Use those insipid words again and I shall leave the room this instant!

This makes ELINOR laugh in spite of her discomfort.

ELINOR: Very well. Forgive me. Believe my feelings to be stronger than I have declared—but further than that you

must not believe.

MARIANNE is flummoxed but she rallies swiftly and picks up her book again.

MARIANNE: 'Is love a fancy or a feeling?' Or a Ferrars?

ELINOR: Go to bed!

ELINOR blushes in good earnest. MARIANNE goes to the door.

→ MARIANNE (*Imitating Elinor*): 'I do not attempt to deny that I think highly of him greatly esteem him! Like him!'

And she is gone, leaving ELINOR both agitated and amused. (E. Thompson, *Sense and Sensibility*)

Ferrars というのが姉の想い人の名前である。コールリッジのソネットになぞらえて姉を茶化したあと，去り際にMarianneは姉の煮え切らないことばを繰り返す（"'I do not attempt to deny that I think highly of him greatly esteem him! Like him!'"）。この発話は，(4)や(5)に比べると，かなりマイルドな例となっているが，口真似をしてパロディー的に提示する点では同じである。もとの発話をあざけったり，茶化したりする模倣引用は，エコー疑問のように聞き手の反応を積極的に求めるわけではない。(5)の Brindsley や(6)の Marianne がしたように，談話の終わりにいわば「捨て台詞」のように用いられることもある。

これに対し，自由間接的なエコーには，パロディーの効果や捨て台詞的な性格はない。たとえば，(7)において家財を一切合財盗まれてしまった Mel は，鍵をかけずに家を出た Edna の行為を考えがたい愚行であると決め付けているようだ。しかし，彼が3度も繰り返すエコーには強い皮肉が込められているとはいえ，Edna の行為を顧みる余地のないあざけりの対象と見ているわけではない。繰り返されるエコーは，Edna の不注意に対し責任を追及し，Edna から何らかの反応を要求する。

(7) MEL: If you didn't have your key, how were you going to get back in the house when you went shopping?
EDNA: I left the door open.
→ MEL: You-left-the-door-open???
EDNA: I didn't have a key, how was I going to get back in the house?
→ MEL: *So you left the door open?* In a city with the highest crime rate in the
→ history of the world, *you left the door open?*
EDNA: What was I going to do? Take the furniture with me?
(N. Simon, *The Prisoner of Second Avenue*)

このように，自由間接的なエコーの後には，たいてい対話者のそのエコーに対する反応が期待されている。自由直接話法とは異なり，相手のことばを自分のディスコースに積極的に取り込んだうえで反応を示す。要するに，自由間接話法は，相手の応答を求めるインタラクティブな繰り返し表現として機能することが多い。

これまで観察してきた自由間接話法と自由直接話法の対話での用法を簡単にまとめると以下のようになる。

(8) 模倣引用（自由直接話法）

相手のことばを自分の言説とは相容れない異物として提示する

パロディー的な価値低下をもたらす

対話者のことばを繰り返す際の有標形式

エコー（自由直接話法）

相手のことばを自分の言説のなかへ取り込んだ上での反応

否定的なものから肯定的なものまで，模倣引用よりも多様な反応ができる

対話者のことばを繰り返す際の無標形式

興味深いのは，両者の間に機能上の住み分け——Horn, 1984の言う語用論的分業 (pragmatic division of labor)——が見られることである。つまり，直前の発話を引用する際に無標の選択となる自由間接話法は，頻繁にしかも幅広い用途で用いられるが，有標形式である自由直接話法は，自由間接話法がカバーしない領域をかすめとることになる。

4．対話における直接話法と間接話法の使い分け

対話において近接する発話を引用する際，伝達節付きの話法は，「自由な」話法では手に負えないときに用いられる有標の選択である。しかし，その場合においても直接話法と間接話法は同じように出現するわけではない。間接話法の使用が一般的であり，用途も幅広い。直接話法は，非常に限られた形でしか用いられない。

従来，文法書では，直接話法と間接話法は話法の２大典型として並列する形で記述されてきた。そして，両者の使い分けについては，通常，原＝発話の形式に関心がある場合は直接話法を用い，内容により関心がある場合は間接話法を用いる，といったぐらいのことしか述べられていない。両者の使用頻度にいたっては，そのような関心すら示されないのがふつうである。私の知るかぎり，内田，1994，1997は，その唯一の例外である。彼は，Svartvik and Quirk, 1980の全データを調査した結果，会話においては純然たる直接話法はまれであり，会話では間接話法の形態の方が直接話法よりも好まれると主張する。[4]

私が映画のシナリオやBNCを用いておこなった調査でも同様の結果が出

4 Although the relation between direct and indirect speech is one of the standard topics in any grammar book, it seems that no one has thought of asking which is more commonly used, or preferred, (14) [= Bill said, 'Ill leave here tomorrow.'], (15) [= Bill said that he would leave tomorrow.], or (16) [= Bill said that he would leave here today.] ? I will argue that (15) and (16) will be preferred to (14) according to a pragmatically determined principle. (Uchida, 1997:11)

た。ここでも直接的な話法は有標の構造であったのである。まず，間接話法が対話的に用いられている様子を確認しておこう。

間接話法にはさまざまな用途がある。たとえば，相手に異論を唱えたり，自分の発言に対する誤解を解いたりするために用いられる。

(9) CANDY: (*To Homer*) Wally thinks apples are boring.
→ WALLY: (*To Homer*) I never said they were boring.
CANDY: You said, "Apples aren't exactly flying."
WALLY: Well, they aren't. (J. Irving, *Cider House Rules*)

(10) MARGIE: You married?
BUD: No.
MARGIE: Family?
BUD: No.
MARGIE: A night like this, it sort of spooks you to walk into an empty apartment.
→ BUD: I said I had no family—I didn't say I had an empty apartment.
(B. Wilder and I.A.L. Diamond, *The Apartment*)

(9)でWallyは，Candyの発言に異を唱え，リンゴ農園の仕事はつまらないものだと言った覚えはない，と主張する。(これに対し，Candyは，'You said, "Apples aren't exactly flying."' と以前にWallyが述べた発言を持ち出してくる。これは次節で扱う遠隔化された発話に言及する例で，直接引用を用いることにこの場合は無理がない。) また(10)では，Bud は，自分の発言と相手の前言を間接話法で提示しなおすことによって ("I said I had no family—I didn't say I had an empty apartment."), 相手の勝手な思い込みを訂正している。

さらに，間接話法は相手の発話を直接話法よりも柔軟に取り込むことができる。

(11) JIM #1: Nice to meet you. And this is my partner...
JIM #2: (*Offers his hand*) Jim Berkley, but people call me J.B.
COLONEL: Let's cut to the chase, okay? What are you guys selling?
JIM #2: (*After a beat*) Nothing. We just wanted to say hi to our new neighbors—
→ COLONEL: Yeah, yeah, yeah. But you said you're partners. So what's your business? (A. Ball, *American Beauty*)

Jim #1 と Jim #2 はホモセクシャルのカップルで，ややこしいことに両者は同じ名前である。厳格な軍人である大佐には，partner といえば business partnerとしか思い浮かばない。そこで何のセールスをやっているのだ，と問いかける。留意すべきは，Jim #1 は "And this is my partner..." と JIM #2 を紹介しただけなのだが，"But you said you're partners." というふうに大佐は自分の言いたい内容に合わせて Jim #1 の発言を提示していることである。間接話法は，原＝発話の一部を省略したり，全体を要約したりする点において，直接話法よりも自由に表現を調整できるだけに，より柔軟に他人の発話を提示できる。

また，相手が言わんとする内容を明示し，それに対し反論をおこなう場合にも間接話法が用いられる。

(12) MARLON: (*Staring into Truman's eyes*) And the last thing I'd ever do is lie to you. (*pause*) Think about it, Truman, if everybody's in on it, I'd have to be in on it too. I'm not in on it, because there is no it.
→ TRUMAN: So what are you saying, Marlon, the whole thing has been in my head—?
(A. Niccol, *The Truman Shaw*)

Truman は，本人の知らないうちに幼少のころから実生活を撮影され，テ

レビで生中継されている。そのことにようやく気付きはじめたのだが，そんなことはないとなだめる親友に反論するために，「単なる思い過ごしだとでも言うのか」と食ってかかる。このように，相手に反論するために，相手の言わんとする内容を "what are you saying, (that)..." や "are you saying (that)..." に続けて間接引用で提示することは，口語ではしばしば見受けられる。

これに対し，直接話法で直前のことばに言及する用法は，きわめて少なく，またその用途も限られている。今回，映画のシナリオ25本を利用して調査したが，同じ用法が複数回見受けられたのは2種類のみであった。ひとつは，あるせりふを「言った，言わない」で対話者と争う場合で，もうひとつは，命令文を引用する場合である。そして，そのどちらの場合においても，直接話法（のような形式）が用いられなければならない明確な理由があり，直接話法が有標の選択であることを裏付けている。

まず，「言った，言わない」の例から確認しておこう。⒀は，先に(3)として引用した部分を含んでいる。初めてカウンセリングを受けた Annie がその感想を述べるときに言い間違いをした。その後のやり取りである。また，⒁では Annie が別の男性の名前 (Crash) を思わず口にしてしまったことから，話がこじれてしまった。

⒀ ALVY: (*Thinking*) Tsch, what'd the doctor say?
ANNIE: (*Putting away some groceries*) Well, she said that I should probably come five times a week. And you know something? I don't think I mind analysis at all. The only question is, Will it change my wife?
ALVY: Will it change your wife?
ANNIE: Will it change my life?
→ ALVY: Yeah, but you said, "Will it change my wife"!
→ ANNIE: No, I don't. (*Laughing*) I said, "Will it change my life," Alvy.
→ ALVY: You said, "Will it change..." Wife. Will it change...
ANNIE: (*Yelling out, angry*) Life. I said, "life."
ALVY: (*To the audience*) She said, "Will it change my wife."

(W. Allen, *Annie Hall*)

(14) ANNIE: Yes, yes, yesnmmmmyes... (beat) Oh my... (several beats) Oh, that was just fabulous, Crash.
Several beats of silence.
→ NUKE: Crash? (*He flips on a lamp near the bed.*) You mean Nuke. You said "Crash".
→ ANNIE: I didn't say "Crash". I said Nuke.
→ NUKE: You said "Crash".
ANNIE: Honey, don't ever listen to a woman when she's making love. They'll say the strangest things.
→ NUKE: You said "Crash".
ANNIE: Would you rather me be making love to him, using your name, or making love to you, using his name?
(R. Shelton, *Bull Durham*)

どちらの例でも「言った，言わない」の口論が繰り広げられているが，重要なことは，直接話法を用いないと話者は意図する内容を説明できない，ということである。「言った，言わない」と争うわけであるから，実際に「言った」ことばや「言わなかった」はずのことばを直接引用するしか方法がないのである。つまり，直接話法を用いる積極的な理由が存在しているわけだ。

さらに興味深いのは，Annie が 'I didn't say "Crash". I said Nuke.' と述べるくだりである。言っていないと否定するときには引用符によって直接話法であると明示し，言ったと主張するときには引用符が省かれている。コマや引用符などの書記上の符号は，その使い方に厳密な基準が存在しないことが多いので結論めいたことは言いがたいが，引用符の有無を重視すると "I said Nuke"の部分は間接話法（的）である。自分のことばには間接話法を用い，自分が責任を持たない他人のことばは直接話法を用いて提示している（もしくは劇作家がそのように表記している）ことは，自由間接話法と自

由直接話法の使い分けにも通じるところがある。自由直接話法は自分のディスコースには相容れないものとして他人のことばを提示するのに対して，自由間接話法は他人のことばを自分のディスコースに引き入れて提示するからである。

さて，（見かけ上）直接話法が用いられるもうひとつの場面は，命令を繰り返すときである。次の例では，突如として政界で注目を浴びだした謎の人物 Chancy Gardner のバックグランドを洗えと上司は部下に命じる。

(15) KINNEY: ...Sid, be reasonable — I've been everywhere, there's no place left to check!
COURTNEY: Try again.
KINNEY: Sure, try again — where? There's nothing, it's like Gardiner never existed!
COURTNEY: Try again.
KINNEY: It's useless!
→ COURTNEY: (*coldly*) I said — try again.
Kinney stands, shoves her paperwork across the table.
KINNEY: Up yours, Sid. You try again, I quit!
(J. Kosinski, *Being There*)

命令を3度繰り返す際に Courtney は "I said — try again" と言い放つ。聞き届けられなかった命令を繰り返すとき，"I said"＋［命令文］のかたちがしばしば用いられる。

しかし，この形式がはたして直接話法なのか間接話法なのかについては，意見が分かれるように思う。伝統的な文法書の記述（さらに，Banfield, 1982を参照）では，間接話法は命令文や疑問文をそのままの形では引用できないことになっているので，その規則に当てはめるとこの形式は直接話法ということになる。しかし，口語の談話には（そして小説においても）疑問文や命令文のかたちをとる間接話法の例がときおり見受けられる。したがって，

形態面からは直接・間接の区別がつきにくい。さらに，命令文の形を取らないが命令をおこなう発話（たとえば，“You're fired!”）を繰り返すような例を考慮に入れると，間接話法としての解釈も捨てがたい。

(16) BOB: You're lint! You're a flea! You're a blip!
DAVE: Well, maybe I am. But you're fired.
Bob backs up a step and stares at him.
BOB: ... what?
→ DAVE: I said you're fired. Go on—get outta here.
(G. Ross, *Dave*)

結局のところ，上の例の場合，伝達節と被伝達節とのあいだに置かれるポーズの長さによって，直接話法となるのか間接話法となるのか解釈が変わるようだが，このような状況では，直接間接の区別を厳密につける必要がない，とも言える。

しかし，(15)のような例がたとえ直接話法であったとしても，直接話法のような形態を維持しなければならない理由は，現に存在する。つまり，(15)のような例では被伝達節が命令文の形を保持していること自体が重要なのである。命令を下したことを明示するだけでなく，その明示の行為によって新たに命令を発動させたいのなら，被伝達節は元の命令文の形がそのまま引用されたほうが都合がよい。したがって，ここで（有標の）直接引用形式が用いられている（ように見える）ことには，十分な根拠が存在するのである。

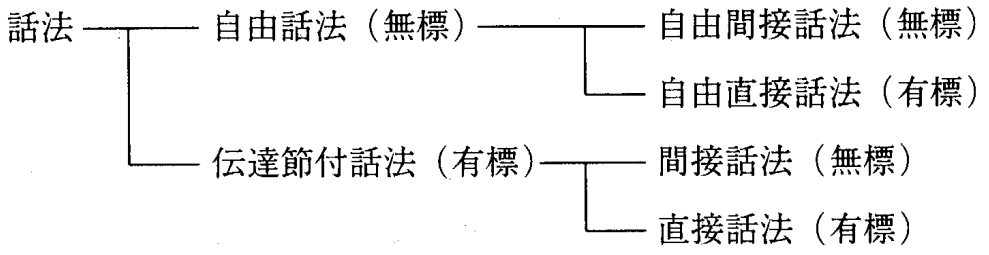
本節の主張をまとめると，次のようになる。対話的コンテクストにおいて近接的な発話（相手の直前の発話）に言及する場合，間接話法が無標で，直接話法は有標のオプションとなる。間接話法はより頻繁に用いられ，より幅広い用途が割り当てられる。それに対し，直接話法が使われる場面はかなり限定される。

このような結果は，私たちが日常の伝達において発話の形式よりも伝達内容に重点を置いていることと無縁ではない。つまり，会話をおこなうにあた

り，重要なのは相手の発話内容なのであって，その発言がどのようになされたのかに注意を払うのは例外的な状況に限られる。したがって，発話の形式を引用できる直接話法が必要となるのも，例外的な状況に限られるのである。

このように考えると，対話のやり取りにおいて近接的な発話を引用する際，直接話法は二重の意味で有標であることになる。まず，対話的やり取りにおいては伝達節のない「自由な」話法が無標の選択であり，伝達節つきの直接話法と間接話法は有標の構造である。さらに，伝達節つきの話法が使われる場合であっても，無標のオプションは間接話法であって，直接話法ではない。図示すると次のようになる。

(17) 対話において近接発話を引用する際の話法の選択



話法の例として一番に名前が挙がるのはおそらく直接話法だが，対話的なコンテクストにおいては，出番があまりないようだ。

5．語りにおける直接話法と間接話法

最後に，口頭の語りにおける直接話法と間接話法の使い分けについて少し触れておく。対話のやり取りで近接的発話に言及する際には肩身の狭かった直接話法は，語りにおいてはじめて無標の話法形式となる。語りのコンテクストでは今ここにはいない第3者の行動に焦点が当てられるが，その第3，者が発した遠隔化された（displaced）ことばを臨場感豊かに報告できるからである。同様に，他者の発言を取りまとめて報告できる間接話法も，発話内

容の円滑に提示するのに便利である。一般に受け入れられている直接話法や間接話法のイメージは，この語りのコンテクストにおける用法を反映している。

さて，口頭の語りはいきなり登場人物のせりふの提示から始まることはない。Labov の先駆的研究(Labov and Waltzky, 1967; Labov, 1972)にもあるように，語られる出来事の要約(abstract)や状況設定(orientation)などの背景情報から語られるのが常である。話法が用いられる順序としては，間接話法から直接話法へと移行することが多いが，これは背景情報から前景情報へといたる語りにおける情報提示の順序に対応している。インタビューを筆記した Terkel のオーラルヒストリーにその例を求めてみた。

(18) I have been counseling his wife. She asked was I going to continue to press charges against him. I told her, "Yes, because he violated me. You just don't disrespect people like that." So she said, "Okay. I hope you don't change your mind. He steals all my food, he steals everything in the house and sells it for drugs. Maybe I'll have the opportunity to get my life in some better order." (S. Terkel, *Race*)

(19) My father was a very fair man, not educated. He used to tell me they were mistreated in the mines, especially before the union. He said, "You wouldn't want to trade places with them. They have a hard time." (S. Terkel, *Race*)

どちらの例でも間接話法の後に直接話法が続く。(18)ではソーシャルワーカーである語り手とそのクライアントとの会話が直接話法で提示されるが，そのやり取りの先触れとなるのが間接話法で伝えられるクライアントの質問である("She asked was I going to continue to press charges against him.")。(19)は語り手の父が伝えた炭鉱での人種差別の様子について，父が繰り返し語ったことを大まかに要約しながらまず間接話法で伝える。そして，父が語っ

た具体的な発話をひとつ取り上げ，その発話を直接話法によって提示することで目立たせる。

上で見たように，語りのコンテクストにおいて直接話法と間接話法が併用される場合，直接話法がより前景化された個別的な発話を伝え，間接話法は背景的な情報提示を担うことが多い。両者のこのような対立は，文学研究でよく言われる showing と telling との対立も呼応する。もちろん，直接話法が showing を担い，間接話法が telling を受け持つ。

では，語りのコンテクストにおいて有標の選択となる自由な話法はこの直接話法と間接話法の使い分けとどのような形で関係付けられるだろうか。自由間接話法の例を最後に見ておこう。[5] 臨場性という点では直接話法ほどではないにせよ，間接話法よりは豊かな提示ができる自由間接話法は，ちょうど両者のあいだに「居場所」を見つけるようである。

(20) My mom had always wanted me to better myself. I wanted to better myself because of her. Now when the strikes started, I told her I was going to join the union and the whole movement. I told her I was going to work without pay. She said she was proud of me. (His eyes glisten. A long, long pause.) See, I told her I wanted to be with my people. If I were a company man, nobody

---

5 自由直接話法の使われ方は，もう少し微妙である。口頭の語りでは，直接話法との対立関係がときにあいまいになることがあるからである。(小説ではその傾向が強い。山口，2000を参照。) しかし，過去の発話を批判的に提示する際に自由直接話法はその力を発揮するようである。

I get mad because they don't see me. They see black. I'm not trying to act like I'm better than anyone else, but they don't see that I'm fairly intelligent. That I have opinions on different things. All they see is that I'm black and all that goes with it: "She must be good in the kitchen. She must be a good dancer." Definitely not true. "She must be good at basketball." Not true. "She must like watermelon." I've actually had people say to me, "We're going to have watermelon, you'll like that." I don't like watermelon. I don't like any melon. (S. Terkel, Race)

上の自由直接引用の部分はおそらく皮肉なイントネーションを伴って提示されたことだろう。しかも注目すべきは，語り手による批判が音調面だけでなく，"Definitely not true." や "Not true."のように，ことばの形をとって引用の後にちりばめられていることである。

would like me any more. I had to belong to somebody and this was it right here. She said, "I pushed you in your early years to try to better yourself and get a social position. But I see that's not the answer. I know I'll be proud of you."

(S. Terkel, *Working*)

⑳では，語り手の感情が高ぶり，話がクライマックスへと向かっている。そのような話の流れに従うように，発話の提示は間接話法から自由間接話法へ，そして直接話法へと移行してゆく。"If I were a company man, nobody would like me any more. I had to belong to somebody and this was it right here." の部分が自由間接話法にあたるが，この部分は直前の間接話法が要約して伝えた発話内容（"See, I told her I wanted to be with my people."）をより具体的に提示したものと考えられる。そして，最大の山場は直接話法が再現する。三つの話法が発話の報告という同じ仕事を担ったわけであるが，その三つが果たした仕事のやり方はそれぞれ異なっており，ここにも語用論的な分業を見ることができるのは興味深い。

6．おわりに

小稿は，従来の話法分析に潜む暗黙の前提にとらわれることなく，新しい視座から直接的話法と間接的話法の使い分けについて論じてきた。ここで得られた知見を手短にまとめると，以下のようになる。

まず，直接的話法は発話の再現（showing）に用いられることが多く，原＝発話の形式面にも注意を払った引用方法である。また，引用される他人のことばを自分のディスコースから引き離す効果も持つ。これに対し，間接的話法は発話内容に着目した引用手段であり，他人のことばを自分のディスコースに積極的に引き入れながら発話の提示をおこなう。直接的話法は発話の再現にかかわるだけに，情報伝達をできるだけ円滑に進めようとする場合には

あまり向かない。時間とコストが余計にかかるのである。そのような場面では，間接的話法が用いられる傾向にある。

対話のやり取りはまさにそのようなコンテクストである。そこでは相手の意図や伝達内容が理解できることがまず優先され，相手がどのようなことばで語ったかはそれほど重要視されない。したがって，直接的話法には限られた用法しか与えられないことになる。ことに伝達障害が存在するような場面，つまり，対話のコンテクストにおいて直前の発話を引用せねばならないような場面では，直接的話法は有標の引用形式となる。

一方，語りのコンテクストでは，出来事の筋を伝えるという情報伝達の必要に加え，登場人物（おもに過去における語り手自身）が過去の出来事のなかで具体的にどのように感じ，どのようなことば遣いで，どのような口調でしゃべったのかたのかを共有しようとする傾向も強い。直接的話法に大きな役割が与えられるのはそのようなコンテクストである。ことに直接話法は，誰がどのように話したのかを臨場感豊かに伝えるのに適している。したがって，語りのコンテクストにおいて直接話法は無標の構造となるのである。

直接話法は原＝発話の形式に着目し，間接話法はその内容に着目する。両話法に対して従来与えられてきたこのイメージは間違ってはいない。しかし，そのようなイメージはことの一面を照らすだけである。コンテクストに応じてどのような話法がどのような用いられ方をするのかが決まる。対話から語りへというコンテクストの変化を考慮してはじめて，話法のはたらきの変化がダイナミックに浮かび上がってくるのだ。しかも，その変化はきわめて理にかなった変化なのである。

参考文献

Banfield, Ann. 1982. *Unspeakable Sentences: Narration and Representation in the Language of Fiction.* Boston: Routledge & Kegan Paul.

Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad, and

Edward Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English.* London: Longman.

Blakemore, Diane. 1994. Echo questions: A pragmatic account. *Lingua* 94, 197-211.

Chafe, Wallace. 1992. Immediacy and displacement in consciousness and language. Coulmas, Florian and Jacob L. Mey (eds.) *Cooperating with Written Texts: The Pragmatics and Comprehension of Written Texts.* Berlin: Mouton de Gruyter. 231-55.

———. 1994. *Discourse, Consciousness, and Time: The Flow and Displacement of Conscious Experience in Speaking and Writing.* Chicago: The University of Chicago Press.

Chatman, Seymour, 1978. *Story and Discourse: Narrative Structure in Fiction and Film.* Ithaca: Cornell University Press.

Clark, Herbert H. and Richard J. Gerrig. 1990. Quotation as demonstration. *Language* 66, 764-805.

Couper-Kuhlen, Elizabeth. 1996. The prosody of repetition: On quoting and mimicry. Couper-Kuhlen, Elizabeth and Margaret Selting (eds.) *Prosody in Conversation: Interactional Studies.* Cambridge: Cambridge University Press. 366-405.

Fludernik, Monika. 1993. *The Fictions of Language and the Languages of Fiction: The Linguistic Representation of Speech and Consciousness.* London: Routledge.

Guldemann, Tom and Manfred von Roncador (eds.) 2002. *Reported Discourse: A Meeting Ground for Different Linguistic Domains.* Amsterdam: John Benjamins.

Hickmann, Maya. 1993. The boundaries of reported speech: Some developmental aspects. Lucy, John (ed.) *Reflexive Language: Reported Speech and Metapragmatics.* Cambridge: Cambridge University Press. 63-90.

Holt, Elizabeth. 1999. Just gasing: An analysis of direct reported speech in a conversation between employees of a gas supply company. *Text* 19, 505-37.

Horn, Laurence R. 1984. Toward a new taxonomy for pragmatic inference: Q-based and R-based implicature. *GURT 1984,* 11-42.

Janda, Richard D. 1985. Echo-questions are evidence for what? *CLS* 21, 171-88.

Jespersen, Otto. 1914 (1961). *A Modern English Grammar on Historical Principles, PartII.* London: George Allen & Unwin.

木原研三. 1955. 『呼應・話法』研究社.

Labov, Williams. 1972. The transformation of experience in narrative syntax. *Language in the Inner City: Studies in the Black English Vernacular.* Philadelphia: University of Philadelphia Press. 354-405.

———. and Joshua Waletzky. 1967. Narrative analysis: Oral versions of personal experience. Helm, June (ed.) *Essays on the Verbal and Visual Arts: Proceedings of the 1966 Annual Spring Meeting of the American Ethnological Society.* Seattle: American Ethnological Society. 12-44.

Leech, Geoffrey N. and Michael H. Short. 1981. *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose.* London: Longman.

Li, Charles. 1986. Direct speech and indirect speech: A functional study. Coulmas, Florian (ed.) *Direct and Indirect Speech.* Berlin: Mouton de Gruyter. 29-45.

Longacre, Robert. 1994. The dynamics of reported dialogue in narrative. *Word* 45:2, 125-43.

Macaulay, Ronald K. 1987. Polyphonic monologues: Quoted direct speech in oral narratives. *Papers in Pragmatics* 1: 2, 1-34.

Mathis, Terrie and George Yule. 1994. Zero quotatives. *Discourse Processes* 18, 63-76.

Noh, Eun-Ju. 2000. *Metarepresentaiton: A Relevance-theory Approach.* Amsterdam: John Benjamins.

大沼雅彦 1970 「要説口語文法: (8) Echo Expression」『英語研究』1970年8月号, 40-41.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language.* London: Longman.

Semino, Elena, Mick Short, and Jonathan Culpeper. 1997. Using a corpus

to test a model of speech and thought presentation. *Poetics* 25, 17-34.

Short, Mick. 1988. Speech presentation, the novel and the press. van Peer, Willie (ed.) *The Taming of the Text: Explorations in Language, Literature, and Culture.* London: Routledge. 61-81.

———. 1996. *Exploring the Language of Poems, Plays and Prose.* London: Longman.

Simpson, Paul. 1997. A quadrant model for the study of speech and thought presentation. *Journal of Literary Semantics* 26, 211-18.

Svartvik, Jan and Randolph Quirk. 1980. *A Corpus of English Conversation.* Lund : C.W.K. Gleerup.

Thompson, Geoff. 1994. *Reporting.* London: Harper and Collins.

Toolan, Michael. 2001. *Narrative: A Critical Linguistic Introduction (Second Edition).* London and New York: Routledge.

Uchida, Seiji (内田聖二). 1994. 会話と引用. 池浦貞彦教授退官記念論文集編集委員会（編）『英語学と英語教育学』開隆堂. 13-22.

———. 1997. Immediate contexts and reported speech. *UCL working Papers in Linguistics* 9, 149-75.

Weinrich, Harald (バインリッヒ, ハラルト). 1976 (1984). 「メタ言語の日常性について」『言語とテクスト』(脇阪豊ほか（訳)) 紀伊國屋書店. 93-118.

Wierzbicka, Anna. 1974. The semantics of direct and indirect discourse. *Papers in Linguistics* 7:3, 267-307.

Yamaguchi, Haruhiko (山口治彦). 1989. On "unspeakable sentences": A pragmatic review. *Journal of Pragmatics* 13, 577-596.

———. 1992.「繰り返せないことば：コンテクストが引用にもたらす影響」安井泉（編）『グラマー・テクスト・レトリック』くろしお出版. 289-320.

———. 1994a. Unrepeatable sentences: Contextual influence on speech and thought presentation. Parret, Hartmut (ed.) *Pretending to Communicate.* Berlin: Walter de Gruyter. 239-52.

———. 1994b. Echo utterances. Asher, R. E. (ed.) *The Encyclopedia of Language and Linguistics.* Oxford: Pergamon Press. 1084-85.

———. 2000. 「話法とコンテクスト：自由直接話法をめぐって」JELS 17（日本英語学会第17回大会研究発表論文集), 261-70.

———. 2002.「直示動詞と対話空間：英語, 日本語, そして九州方言をもとに」

『神戸外大論叢』53:3, 51-70.
———. 2003a. 「話法研究に潜む前提：英語話法再考(1)」*CLAVEL* 1. (対照研究セミナー).
———. 2003b. 「対話の話法，語りの話法：英語話法再考(2)」『神戸外大論叢』54:4, 15-34.
———. 2005. 「語りで味わう：味ことばの謎とフィクションの構造」 瀬戸賢一ほか『味ことばの世界』海鳴社. 162-205.